ふ也。【九輪草】 亭をぬきん出て小花を開く。櫻草の花に似たり。莖のめぐりに澤山の花をつけ車輪の如し。梢に至つて七層或は九層九輪に似たるより此の名有。〔ヤ〕【鑓梅】 中花にして白く淡紅色を帶ぶ。【柳】 枝硬くして揚起す、故に楊といひ柳は枝弱くして柳す、故に柳と云。初春柔芽を生じ黄なる蕊花を開く。【柳髮】【柳腰】【柳眉】共に柳を以て美人の形容とせし言葉也。【山櫻】 一重櫻の一種、山野平林に自生す。梅に野梅といふが如し。色薄く、花小さし。【山根草】蕨の異名。【八重梅】 八重の梅也。【八重櫻】 櫻の八重なるもの也。一重櫻の後に咲く。【棠梨花】 梨花の部を見よ。【楊梅の花】 木の高さ丈へ、水楊の如く細く厚く綠深し。冬も枯れず二月花咲き三四

月に實を結ぶ。【山吹】 四五尺の灌木にして黄色の花を開き、一重八重の二種有。〔マ〕【松の花】 十返りの花とも云ふ。二三月頃花を生ず長四五寸其の花蘂をとりて松黄とす、松の花は十返りの花とて千年に一度花咲くと云ふ。或は百年に一度とも云ふ。【眉作花】 薊の部を見よ。〔ケ〕【罌子】 紅白二種有、其の實瓶子の如く鏑箭に似たり。米粒極めて細かき有。冬より春に至つて苗を生ず。極めて繁茂す。【五形花】 蓮華草の事、三味線草とも云ふ。蓮華草の部參照。【源平桃】 日月桃、江戸桃、皆同じ。漢名を金銀桃と云ふ。花は八重にして色紅に白く或は咲分飛火有。【毛桃】 はしけやしわぎへの毛桃本しげく花のみさきてならざらめやも(萬葉) 〔フ〕【福壽草】 元日草とも云ふ。

正月頃黄なる花開く。目出度花とす。【冬桃】 冬の桃にして花一重なり。【藤】 春の末より咲く。花房三尺にあまる有、色薄紫、白有

【蕗の薹】 蕗の花にて早春薄黄なる福壽草の如きもの地より抽て出づ香氣高く食用とす。〔コ〕【柑子】 橘より小さく皮薄し。【紅梅】 紅の梅花は一重。【江梅】 野梅也。其の花單重小さく白し。【好文木】 梅の異名。梅は花中の儒者也といふ意味ならん。【この花】 梅の異名

『なにはづに咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花』といふ歌より來りしものならん。【瘤柳】 白楊也。丸葉柳といふ。其の皮を剝げば瘤ある肌の如し。それより名づく。【水葱摘】 水邊に有葉。澤潟に似て小く、花青白色食用とす。或は澤桔梗とも呼ぶ。【小梅の

花】 庭梅也。叢生して高さ三四尺花開く。形梅に似て小さく白色にして紅色を帶ぶ。藥黄にして甚だ繁く美麗也。花落て葉生ず。狹く長し。庭櫻の葉に似て實を結ぶ。【辛夷】 一名候桃、木筆と云ふ。二月花咲き、花散つて實をなす。柿の葉に似て紫の苞紅焰有。又白花有小幣の如し。故に幣こぶしといふ。紫のもの木蓮に似たり。香氣蓮の如く蘭の如し。【糝米】 木小にして叢生す。高さ三四尺狹く長く薄し。縱筋有。二三月頃白花咲く。形蒸したる小米の如し。故に俗稱小米花と名づく。【小粉團花】 木の高さ三四尺葉狹く長し。山吹の葉に似たり。【高麗菊】 春菊の事なり。其の部參照。【金王櫻】 一名憂忘櫻と云ふ。東京澁谷八幡の社地に有。澁谷金王が植えたる也と云ひ傳ふ

〔エ〕【越中梅】　大花にして白く淡紅を帶ぶ。豐後梅に似たり。八重にして二月に開く。【江戸桃】　源平桃、見よ。【江戸櫻】　遲櫻也。葉小にして赤し。花大輪にして莖長く下に垂る。此の種關東に多き故此名有。【化偸草】　冬凋まず、葉車前子に似て厚く長く、地に敷きて生ず三四月頃莖を抽でゝ花を開く。肉紅色、或は淡黄、或は柿色、數色有其根蝦に似たりと云ふ。〔ア〕【青柳】　春の初め柔芽を出し即ち黄蘂の花を開く。其の頃葉の綠なるを云ふ。【淺葱櫻】　大輪にして八重、色は淡青にして白色を含む。異つた花也。【あたな草】　櫻の異名也。【杏の花】　其の花麗し。唐音を呼てアンズと云ふ。花紅にして八重なる有。俗に六代と名づく。其の木ひくき時花を見るによし。長じては切

るべし。平重盛孫六代年長じて斬られし故に名有。【馬酔木花】　山谷に生ず。高きもの二三丈、小さきは一二尺、枝葉茂る。其の葉狹く長く、鋸の如き齒有。淺綠の色硬くして枝椏にあつまり生じ花芽を出し春小さき白花を開く。房をなす。實も又房をなす。四時枯れず。馬此の葉を食へば醉ふと傳へらる。故に此の名有。【薊】　眉作の花と呼ぶ。二月苗を生じ二三寸の時根を併せて菜となして食ふ。四月頃高さ尺餘、刺多し。心中に花頭を出す。紅藍花の如し。故に眉作の花と云ふ大薊は鬼の眉拂と云ふ。【涌草花】　蔓草也。葉五葉に分る。三月紫の花を開く。花の形三つに分る。秋圓き實を結ぶ。【東菊】　其の芽生えは蒲公英の葉に似て鋸齒をなし稍長じて車前子の葉の如し。

莖を抽んで出る事六七寸小さき葉有。莖の頭に花を開く。一莖一花、形菊花に似て色淡碧色、黄心あれども單重に非ず。細き瓣重り咲けども單重の形也。三四月頃野に咲く。〔サ〕【櫻梅】淺紅色の花、八重也。【早桃】花一重也。【櫻】初櫻、一重櫻、水櫻、姥櫻、兒櫻など種々有。異名としても夢見草、あだなぐさ、かざし草、吉野草、曙草など有。三月花開き、小さき實を結ぶ。【櫻田】深山櫻のことを云ふ也【櫻狩】櫻の花を尋ね求むる也。【櫻草】多く山谷に生ず。即ち九輪草の一種なり。葉小さく緑に鋸齒有。葉の心白し。三四月頃莖を抽んで出て花を生ず。單重にて色は淡紫、或は白花。櫻の花の如く美し故に名有。〔キ〕【行幸梅】綸旨梅とも云ふ。大花にして色紅也。【金

鳳花】春苗を生じ高きもの尺餘。一枝に三葉、葉に三尖及び三缺有四五月頃小さい黄な花を開く。河骨の花に似る。甚だ美しく毒草也。實は桑の實に似たり。【金盞花】金盞とは花の形を云ふ。一名長春花。名の如く生命長し。莖の頭に花開く。大さ指頭の位。黄金色。狀盞の如し。四時絶ず。【霧島】つゞじ。紅白紫數種有。もと大隅國霧島にあり。故に名有。〔ユ〕【柚柑】柚の一種也。其の葉、花柚と異ならず。實も柚に同じいと大なり。【夢見草】櫻の異名。【櫻桃花】大きなるもの丈に近し。春花咲く。形梅に似て小さく白花茂り咲く。其の葉圓く尖り、榛葉の如く頗る小さし、細き齒及び小毛有。實を結ぶ。一枝數十個、大さ庭梅の如し。夏熟し珊瑚の如く美し。とりて食

す。〔ミ〕【未開紅】 梅の一種也。色紅にして八重、殊に花大也。未だ咲かざる時も紅也。故に此の名有。【御酒古草】 三月三日内裡にて御酒に入らるゝ桃を云ふ。【三千代草】 桃の異名也。【水蕗花】 三月葉を生じ水に生ず。蓮の葉より大也。面青く裏紫、莖葉皆刺有。其莖長さ丈餘、中に穴有絲有。嫩は食用に供す。五六月紫の花を開く、花開いて日に向ふ時苞を結ぶ。外に青き刺あり、栗の毬の如し、多く水澤に生ず。俗に雞頭盤と云ふ。或は鬼蓮とも云ふ。〔シ〕【しだり柳】 垂れたる柳也。【垂桃】 赤白の二種有。八重、單重有。【日月桃】 源平桃の事、其の部參照。【白桃】 碧桃と云ふ。『白桃や雫も落ちず水の色』(桃隆)【石楠花】 しやくなぎとも云ふ。石間の陽に向ふ處

に生ず。故に石南とも名づく。深山に有。大和の金剛山に最も多し。樹大なるは丈に過ず。枝條柔軟にして葉は沈丁花に似る。厚く長し。面深緑色、背に毛有。茶褐色也。四月密生したる花咲く。桃色也。【椶の花】 葉は長く香有。六月頃白花開き實を結ぶ。【沈丁花】 高きもの四五尺、葉は齒なき梔子葉及び楊梅の葉に似る。春花咲く。紫色也。既に開くる時は四出、外淡、内白く、十餘朶集れり。其の香高し。【春菊】 高麗菊とも呼ぶ。春咲き菊に似たり。故に此の名有。莖葉を食用とす。然れども百花未だ開かざるに此の花有。故に花を賞して食用とせず。一度刈つて後、自ら葉を生ず。六七月頃の花も又見るべし。【鹽竈櫻】 此の花至つて艶麗也。其の樹葉殊に美し。【秋色

櫻】 東叡山清水堂の井の傍に有。一名大般若櫻と呼ぶ。故事に依る。

〔ヒ〕【一重櫻】 彼岸櫻より少しおくれて花を開く。又八重櫻より少し早し。一重を以て本とす。依つて只櫻とのみ稱するは此の一重櫻也。

【彼岸櫻】 小さき白き花、單重也。彼岸の頃咲く故此の名有。一名小櫻とも云ふ。【緋桃】 八重にして深紅也。〔モ〕【桃の花】 緋桃、碧桃、金銀桃、源平桃、江戸桃其の他多くの種類有。春花開く。白き紅、薄紅有。【木蓮花】 紫なるを木蓮花と云ふ。花の色惡し。白きを白木蓮といふ。白きとよしとす。葉は辛夷に似て花は蓮花の如し。三月に開く。〔ス〕【杉菜】 春花を開く、筆の如し、若芽の頃食用とす。杉に似たるより此の名有。【李花】 三月花咲く。單葉、五出、白色也。

形桃に似て味酸し。【蘇枋の花】 春紫の花を開く。甚だ細也。花散つて葉生ず。花は密生す。木小なり。【菫】 野生の花也。花は紫、白、薄紫有。春咲くなり。又は相撲花ともよぶ。子供花をとつて其のかぎあるところを相交へてかけて引いて遊びとするに依る。

鳥の部

〔ハ〕【初鷄】 元日の朝鷄の鳴を云ふ。元日を鷄旦とも云ふ。【初鳥】 元日の朝第一番の鳥の聲を云ふ。【春告鳥】 鶯の異名也。『鶯の谷より出づる聲なくば春來る事を誰か知らまし』(大江千里)【孕雀】 春二三月秋八九月孕て卵を生む。【はこ鳥】 顔鳥の部に有。【花鳥】

花に宿る鳥、或は花と鳥の事にも云ふ。花と鳥の時は鳥の字すみて訓也。〔ニ〕【匂ひ鳥】 鶯の異名也。〔ホ〕【郭公の巣】 杜鵑は巣を營む事能はず、鶯の古巣を借りて卵を生ず。〔ト〕【鳥追】 昔は元日より十五日に至り笠を着白手拭にて頬冠りをし手を叩きて祝詞をのべ門毎に米を乞ふ。是を敲の與次郎と號す。又鳥追とも云ふ。元民間にて田の鳥を追ふより出でし言葉也。【鳥さかる】 鳥の交尾する事也。【鳥囀づる】 『百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我れぞ古り行く』(古今集)【とぐめ鳥】 鶯の異名也『鶯の來つゝ鳴くなり我が宿の八重紅梅の花ふみ散らし』(公忠)【鳥歸る】 『花は根に鳥は古巣に返る』春のとまりを知る人ぞなき』(順德院)〔カ〕【貌鳥】【かほよ鳥】

はこ鳥とも云ふ。片戀するものと云へり。夜晝絶えず戀をすると云ふ【歸る雁】 雁が歸り來るを云ふ。【今はの雁】 今はかくはんと思ひ立つ有樣を云ふ。【雁風呂】 秋雁の渡る時小さき木をくはへ來る。是を海の上に浮べ其の上にて羽の疲を休む。其木を南部外ケ濱邊に落しおき又春その木をくはへて歸るに、殘れる木多くあるは人に捕られ又は死せし雁のあればなり。故に其の木を拾ひ供養の爲めに風呂をたきて諸人に入らしむと云ふ。【勝鳥】 三月三日清涼殿南階の前にて行はせらる。周の世に起れりと云ふ。即ち鬪鷄也。鷄を戰はす也。〔ツ〕【繼尾鷹】 鳴鳥狩の部を見よ。【燕】 燕の巣、正鳥、鷽鳥、玄鳥と云ふ。春來り秋去る。飛ぶ事甚だ早く。益鳥の類なり。〔ナ〕【鳴鳥狩】 泊山

朝鷹、鈴こさす、繼尾鷹など云ふ。泊山とは山野に出でゝ宵に雉子の鳴く處を聞き置きて未明に行きて鷹に雉子をとらするを云ふ。これを鳴鳥狩とも、聞すえ鳥とも、朝鷹とも云ふ。又鈴こさすは鷹にかけたる鈴に鈴子と云ものをさして鈴の鳴らざるやうにして鷹をすえて狩する也。鳥を驚かさぬ爲め也。又繼尾は昔繼尾の鷹と云もの有。鵠の尾を以てこれを接ぐ。【鳴雲雀】雀より稍大にして、頭背に赤黑の班點有。眼のふちと首の處に白毛有て胸腹共に灰色なり。鳴雲雀、即ち其の鳥の鳴く事也。チヨ〳〵と野の空高く歌ふ。〔ム〕【麥鶉】三四月頃田の麥長き時これを取るものを呼むで麥鶉と云ふ。雌は囀らず。【田鼠化爲鶉】禮記の月令に田鼠化して鶉となると有。夏の小正に

は三月田鼠化して鶉となり八月鶉化して田鼠となるとあり、それより言ひ傳へられ遂に俗説となる。『念佛せよ田鼠鶉になり度くば』（一茶）〔ウ〕【鶯】二月に至る毎に鳴を春起と云ひ三月に至りて鳴止むを春去と云。呼で報春鳥と云ふ。鳴時は尾を動かす。立春に至つて始て囀り、春去つて鳴き止む。其聲淸亮なり。飛啼する時は急にして長し。谷渡りと云ふ。法華經と云ふが如し。或は日月星といふ如し。〔歌よみ鳥〕鶯を云ふ。『花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけばいきとし生ける者何れか歌をよまざりける』と古今集の序にあるより斯く名づく。といめ鳥、人來鳥、金衣鳥、春告鳥、にほひ鳥皆鶯の異名也。黃鳥漢詩に云ふ、此の名は朝鮮鶯を斯く呼ぶと云ふ。其羽眞黃に

して大きさ鳩の如しとぞ。【鶯笛】 童等の造りて吹笛の一種也とぞ

【鷽】【鷽の琴】 其の聲圓滑にして短く、鳴時聲に從ひて兩脚を互にあげ、琵をひく手の如し。故に俗に宇曾琴をひくと云ふ。或は形麗しく聲艶なるを以て宇曾姫と云ふ。雄は晴を呼び、雌は雨を呼ぶ、雄をてりうそと云紅く、雌をあまうそと云紅からず。【鶉の巣】 鶉は、性醇にして淺草にかくれ伏す。巣を草中に營む。雀の巣に似たり。

〔ケ〕【雲に入鳥】『花落隨レ風、鳥入レ雲』『行末は雲路に入て見えずともかすまで歸れ春の雁金』〔ヤ〕【野鶏】 雉子の事也。其の部參照。

〔マ〕【松拗鳥】 菊いたゞきの類の小鳥にして甚だ殞やすく籠の中に養ひ難しと。蟬の如く喧しく鳴く。又啄木鳥と云ふとも云へり。〔コ〕【駒

鳥】 形鶯に似て大きく全身淡黒き鳥にてカラ〳〵と鳴く聲走馬の轡の音の如きより此の名有。〔ア〕【揚雲雀】 雲雀の舞ひ上り歌ふを云ふ。〔キ〕【金衣鳥】 鶯の異名也。【經よみ鳥】 鶯の異名。其の鳴聲法華經と云ふが爲め也。【雉子】 きゞす。又野鶏とも云ふ。雄は頭に二つの角毛有。頭頸胸腹翠黒色にして光澤有。頰眼紅に、觜青くして尖り、背の羽班也。腰に長き綠の毛有。尾長くして文采有。翅短くして蒼黒班なり。雌は黄赤黒班にして尾短し。此の鳥雛を愛す。

〔ヒ〕【雲雀】 褐色にして鶉に似て小し。叢中に多く住む。【雲雀骨】 瘦せたる人を云ふ。【ひめひな鳥】 雲雀の異名也。『春の野に姫ひな鳥ぞあかるなる霞の中に聲きこえつゝ』【引鶴】【引鴨】 鶴鴨などの冬

より春迄に多く集り居て春は引き歸る也。引鳥といふ事あり。それも歸る意也。〔モ〕【百千鳥】 春に多くの鳥の事を云ふ也。〔ス〕【鈴子さす】 鳴鳥狩を見よ。【雀の子】 孕雀の部を見よ。

夏の巻

花の部

〔イ〕【覆盆子】 蔓に曲れる刺有、一枝五葉、葉小にして表裏青く光り薄くして毛なし。白花を開く。四五月實結ぶ。子をなす事蓬莪よりも小くしてまばら也。最初は黄なるも熟すれば赤し。【石藤】 岩花とも

云ふ。花も葉も共に藤に似る。紫色、或は紫の花開く。草藤、夏藤有。草藤は紫、白の二種有、三四月頃咲く。夏藤は紫藤に似て小さし、山州山科の近邊に有。四月咲く。【紫羅傘】 鳶尾と云ふ。葉射干に似て花の色紫碧也。鳶尾は燕子花の類にして花早く咲く。白花も有。【石蘭花】 石上に群生す、其の根糾結して甚だ繁し。莖葉生じて皆青色、乾く時黄色、紅花を開く。【蘭花】 一名燈心草とも云ふ。是即ち龍の鬚の類也。然し龍の鬚は堅く小さくして甕實す。此の草は稍粗なり、之を筵及び簑を織る。【いばら】 普通植木師の作るは紅白いろ〳〵ありて美しけれども到底野生の小さき白花には及び難し。色淡白にして薫高し。【櫟の花】 實を結ぶものと結ばぬものと有。實を

結ばぬを棫といふ、實を結ぶを栩と云ふ。其の實を橡とす。其の葉樫に似て筋有、四五月花咲く。栗の花の如く黄也。【藺刈る】 此の草備後國に多し、刈て蓆とす。〔ハ〕【葉柳】 春先柔き葉を生じ黄蘂花を開く、晩春に至つて葉長ず。【葉櫻】 櫻の若葉茂れるを云ふ。【はつ見草】 卯の花の異名也。『はつみ草未だ咲かぬ間に時鳥立田の山の里に鳴けり』(藏玉)【白丁花】 花白く微し丁香の氣あり、故に此の名有。樹小さく高さ二三尺枝莖こはく四月小さき白花を開く。大さ三分ばかり。【二十日草】【花王】 牡丹を云ふ。『咲しより散はつる迄見しほどに花のもとにて二十日經にけり』(忠通公)の歌より出でし名か。【花の宰相】 芍藥を云ふ。牡丹を花王とし、芍藥を花の宰相とせしなら

ん。【蓮の浮葉】 蓮の葉也。清明の後、初て水に貼す、是を浮葉といふ。【帚草】 根叢生す。窠毎に三十莖有、莖に赤き有黄有、七月黄なる花咲く。莖を以て掃帚とす。【博多百合】 花黄白色にして裏に赤き斑點あり。【花菖蒲】 白菖の類也、其の葉淡青にて水陸共に叢生す。五月莖を抽ん出て其の先に花を生ず。形燕子花の如し。紫、淡紅、白いろ〳〵有。水菖蒲に似て花を開く故此の名有。【紫維欄花】 白菖に二種有。一種は池澤に生じ根大にして節疎なるを白菖といふ、俗に是を泥菖蒲といふ。一種は谷間に生ず。根かせ赤節稍密なるもの〻溪孫也、俗に之を水菖蒲といふ。あやめは皆燕子花に似て其花紫色、又白色なる有、淡紅なる有。【半夏草】 二月苗を生ず一莖、くきの端に

三つ葉有、淺綠色也。頗る竹の葉に似たり。花は夏の末より秋に及んで咲く、見るに足らず。【蓮の花】水中に夏の朝早く咲く。白き有、紅き有。實及び根食用に供す。〔三〕【忍冬花】金銀花とも云ふ。冬不凋故に此の名有。莖少し、紫色を帶ぶ。莖は對生す、色青く毛有。三四月頃花咲く。長さ寸ばかり、一ふさに兩花一瓣、一つは大、一つは小、半邊の狀の如し。蘂長く、花初めて開くものは蘂瓣共に白色、二三日にして黃色となり、一木に新らしきと舊きと相ひ交りて咲く、故に金銀花と呼ぶ也。香高し。〔ホ〕【厚朴花】其木質朴にして皮厚し、故に此の名有。葉大なるものは尺に近し。槲の葉に似てきざみ目有。色は淺綠也。冬凋て春若芽を生ず、夏花咲く、形牡丹に似たり。色は

淺紫、大さ一尺ばかり。冬青子の實に似たる果實をつく。熟すれば殼自ら裂けて飛ぶ。裏赤し、中の實黑し。老木の皮には鱗の皺有、剝ぎて藥用とす。【牡丹】木芍藥、花の王、ふかみ草、廿日草、富貴草、よろひ草、など種々の異名有。冬部に於て見よ。【寶鐸花】葉は數層をなす。表青く裏紫にして細き毛有、葉下に莖を付て一花を開く。狀鈴鐸の如く倒にたるゝ也。青白色にて黃蘂、中空し、黃なる實を結ぶ。〔ヘ〕【紅藍花】冬種子を蒔き春芽を生ず、夏花なり。いが有て花は其のいがの上に出づ。いがの中に實を結ぶ。其の花を染料に用ふ。〔ト〕【常夏】撫子の部を見よ。【虎毛草】丈二尺餘、夏秋白き花咲く、而して穗を生ず。形獸の尾の如し、故に此の名有。花紅と

白の二種有。【時計草】 かつらに似て細き蔓出で、竹木につきて登る。葉切込有て楓の葉の如し。花の形てつせん風車の如し。花の生命は一日なれど毎日ついで咲く、盛は久し。花開く時は人形を操るが如く廻る、蘂有、伸びる蘂有、上下へかへる蘂有。其の狀時計の機械の如し。依つて名有。〔チ〕【苣薑】 畑に多く栽培す。三四月頃薑が立ち、莖肥中空し。折れば白汁あり。葉毎に莖を抱へ相重りて又を分つ。四五月頃黄なる花咲く。初めて咲く時は野菊の如し。【茶挽草】 雀麥とも云ふ。田野に自生す。苗葉小麥に似て小さく柔し、穂細し。穂粒を爪の上に載すれば旋回すること茶磨を挽が如し、依つて名づく。〔ヲ〕【躍草】 高さ尺ばかり葉少し赤色を帶ぶ。葉小さく葵に似て對生也。三

四月頃葉もとに小花を開く、白色、少し赤味有。人の笠を着て躍るが如し、故に此の名有。【鬼百合】 其の莖葉山丹に似て稍長く大なり。紅花黄を帶て六瓣四方に垂る。上に黑き班點有。其實先結で枝葉の間にあるもの即ち卷母也。【慈姑】 其の苗を俗におもだかと云ふ。其根をくわゐと名づく。單葉の小さき白花を開く。燕尾草と又呼ぶ、葉燕の尾の如し。〔ワ〕【忘草】 萱草の部を見よ。【綿の花】 四月種をおろす、莖弱く蔓の如し。高きもの四五尺葉に三つの尖有、楓の葉の如し。秋に入て花咲く、葵の花の如くして小さし。紅、紫のもの有。實を結ぶ。〔カ〕【貌好草】 芍藥の一名也。花の形綽灼たる故に此の名有。【垣見草】 卯の花の異名也。『時鳥來てやなかまし垣見草花咲にけ

り山里の宿』(藏玉)【要の花】 扇骨木。高さ二三丈、葉は椿の葉に似て狹く小也。細なる鋸齒有、表面滑にして、四月小さき白花を開く。細い實を結び簇をなす。八九月頃赤く熟す。其の木最も堅く扇骨とするによし、故に此の名有。【柿の花】 秋の部にて見よ。【杜若】 かほよ花、かほ花、燕子花など云ふ。其の葉あやめに似て大也。色薄く其花も實も白菖蒲に似て肥大也。紫色を普通とす。其他淺紅、白色いろ〳〵有、五月を盛とす。又四季花咲く有、參州八ツ橋の花名高し。かほよ花とは貌鳥の鳴く頃咲く故此の名有。【風車の花】 蔓草也。葉莖鐵線の類也。花八瓣にして單重、蒼碧色、其形風車に似たり。又白色有。三四月花咲く。【鹿子百合】 白花紫點有。其の花横に向つて開く。紫點ある故に鹿の子百合と名づく。【河原撫子】【唐撫子】 瞿麥の部を見よ。【萍蓬】 葉は芋に似て厚く尖有。莖强く水の上にたちのぼる、葉も花も水面に浮ぶ。根大也。夏黄なる花を開き秋の末迄有。一莖一花を開く。【酢醬草花】 若芽の頃子供とりて食す。一名すかんぽとも云ひ、其の葉酸味有。苗高さ一二寸叢生して地に敷く。四月小さき黄花咲く、小さき實を結ぶ。【蚊帳釣草】 葉穗共に殼根草に同じ、但し根細き髭のみにして實なし、引けば拔けやすし。其葉二角有、二兒中間を裂きて引ひろげ以て蚊帳を釣に比して遊びとす。故に此の名有。【楮花】 紙漉草也。もと楮を作る。其皮績ぎて紵とすべき故也。此の花、雌雄を別つ。雄は皮班にして葉に椏なし、三月花ひらく。柳

の花の如し、實を結ばず。雌は皮白くして葉椏有。碎花を開く、實有。楊梅のごとし、紙を作る。【蒲の穂】 此の花の狀頗る鉾に似たり。故に蒲鉾と云ふ、又蠟燭に似たり。〔ヨ〕【餘花】 春におくれて獨咲き殘る花の事を云ふ。【よろひ草】 牡丹の一名也。〔タ〕【袂百合】 花は白、花片厚く大にして上に向ふ。或は横に垂る。深山の奥に生じてそれをとるに容易ならず。繩にすがりて山に登り一株とりて袂に入れ、又登りてとりては袂に入る、依つて此の名有。〔ツ〕【土孫花】 今なし。【釣鐘草】 花紫色にして下に垂れて鐘を釣れるが如く咲く、故に此の名有。又白花、淡紫のものも有。葉は牡丹の如し。〔ネ〕【合歡花】 此の葉夜に至つて相合ふ、眠れるが如し。故に此の名有。五月花咲く

其の花上半は白、下半は肉紅也、垂れて糸の如し。〔ナ〕【名取草】 牡丹の一名也。【茄子の花】 夏より秋に至て紫花を開く。五瓣相ひ連りて五つの角有。黄蘂、緑のほぞ其實を包む。【南天花】 五月小さい白花を開く。其の葉は竹に似たり、實は赤くなる。【瞿麥】 常夏と云ふ。單重なるものを石竹と云ふ。多瓣なるものを落陽花と名づく。丈尺ばかり、葉尖り、小さく青し。花は紅紫赤色有。五月に咲き七月に實を結ぶ。大和撫子、唐撫子、河原撫子種々有。【夏菊】 菊に、夏菊、秋菊、冬菊有。即ち夏咲く菊を云ふ。〔ウ〕【卯の花】 うつぎとも云ふ。野生也。箱根空木、唐空木、三つ葉空木など有、皆山中に生ず。垣にするは山空木也。莖の中空虚なる故にかく名づく。高さ丈ばかり、皮

は白く、肌深青、其の葉まろく長し。四月頃白き花をつく。簇て咲く故に雪の如し。其他にはつみ草、垣見草、雪見草などの異名有。【夏枯草】 原野に多し。苗の高さ一二尺ばかり、葉は節に對生す。細き齒有、背白く莖のはしに穗を生ず。長一二寸穗の中に薄紫の花が三四月頃咲く。【萍の花】 葉圓く小にして一莖一葉、根水底に入て五月白花を開く。白、黃なるも有。〔ノ〕【凌霄花】 木によつて生ず。高さ數丈、故に凌霄と云ふ。年經れば藤の如く大にして林をなす。春始めて枝を生ず。一枝數葉、尖りて長く齒有、深青色。夏より秋に至つて花咲く、一枝に多く花をもつ。朝顏の花の如き大さなり。頂に五瓣を開く。色は樺、細き點有。秋更くれば更に赤し、八月莢を結ぶ。

〔ク〕【乳柑の花】 葉橙に似て長し。花も又橙に似たり。【雲見草】 楝の異名也。【栗の花】 木の高さ二三丈、四月花咲く。青黃色にして垂る。【山梔子の花】 葉兎の耳の如く厚くして深綠、夏に花咲く。盃の如し。花は白、黃なる蘂有。【車百合】 葉廣く對生して車輪の如し、故に此の名有。其の花瓣卷き返り、横に垂る。日光、和州大峯などに有。【黑百合】 百合の紺色のもの、珍花とす。奥州に有。【葛の花】 蔓あり、丈一二尺、花は豆の花に似て大きく實も又黃色、豆の莢の如し。〔ヤ〕【山苣の花】 山中に有。高きもの二三丈皮粉青白色老る時は淺褐色。中心白く、其の葉梅もどきの葉に似たり。長く尖りて二寸ばかり、表面青く冬凋み春生ず。三四月花咲く。單瓣にして小

さく白し、野梅の花に似たり。【藪椿】 五月細き青白色の花咲く。九月實る。【楊梅】 其の形柳の如く、實の味梅に似たり。〔ケ〕【罌粟の花】 其の實の形罌子の如し。其の實種の形粟の如し。秋植え冬生ず。三四月薹を抽んで出て青苞を結ぶ。花開く時は苞脱す。花は四瓣大さ盃の如し。〔フ〕【深見草】 【富貴草】 共に牡丹の異名也。【風蘭】 一名桂蘭とも云ふ。花小にして蘭に似たり。枝幹短くしてかたし。軒に吊るして水をやりて眺む。〔ヒ〕【江びす草】 芍藥の異名也。【豌豆】 花片蝶の如し。外白く内薄紫也、中心黒色其の實は茶色。六月これを取る。〔テ〕【繡毬花】 木の高さ五七尺、葉は箱根空木に似て圓く皺有。四月花咲く。初は淡青色、後眞白となる。小さき花集りて咲く。又こ

てまりといふ一種有。木の高さ四五尺葉狹く長し。山吹の葉に似て花はてまりに似て小さく白し。【鐵線花】 葉一所より三葉生ず。少し芍藥の樣に似て小く莖細くしなへ強し、故に此の名有。四月花咲く。蕚の下に六葉有て藥を抱く、其の花は白にして花瓣六。〔ア〕【蜀葵】 草葵、タチ葵など有。初春實を蒔き冬又自ら苗を生ず。五六尺にして花咲く。木槿に似て大きく深紅薄紅紫黑、白色、單葉、千葉種々有。【楝の花】 高さ丈餘、葉密にして槐の如く長し。三四月花咲く、色は紅紫色、薫高し。【紫陽花】 四葩の花。唐の招賢寺に山花有。色紫にして香高く、人其の名を知る者なし。白樂天此處を過ぎて標をなす即ち紫陽といふ。其の莖叢生す。莖葉てまりの葉に似て五月花咲く。

【朝菊】 人家の園や畑に植へて愛す。苗冬を經て成長す。高さ四五尺莖細く柔かにして蔓延す。葉は苦菜に似て光澤なし。青色にして淡碧を帶ぶ。四五月葉の間に紫色の花咲く、野菊の如し。朝に開き夕べに萎む。【あざゝ】 池沼に生ず。葉も花も萍蓬草に似て異るところなし。葉は河骨より長く、水中に横たはりて弱く葉は水面に浮ぶ。花の形色ともに河骨に似たり。五六月頃水面に黄色の花を開く。【杏子】 葉圓くして尖あり、二月紅花を開く。【赤草】 一名酸漿と呼ぶ。高さ七八寸ばかり、夏日其莖葉眞紅となる。其苗山澤にあり。故に山ほうづきと名づく。〔サ〕【榊の花】 葉小さく色深青にして香なし。四時しぼまず、小さき白花開き實を結ぶ。後に赤くなる。【柘榴の花】 種類多し。

八重深紅にして實を結ぶものを寶珠と名づく、單重のものを火榴と名づく。よく花咲く。亦八重のものの一種にして白花有、白榴といふ。黄花のものを黄榴と呼ぶ。【さるとりの花】 さるとりいばら也。山野に生ず、葉は柿に似て刺有。【五月躑躅】 杜鵑又は石巖花と名づく。此の花杜鵑の鳴時咲く故斯く云ふならん。山谷に咲く、高さ四五尺、低きもの一二尺、春芽を生じ葉の色淺綠、枝に花多し。二月花初めて開き蓮華つゝじの如くにして柘榴の花の如し。紅紫有、又八重も有。此の種類多し。五月を花の盛りとす、故に五月と稱す。【鷺草】 春芽を生ず、麥の若芽の如し。高さ尺ばかり、六月莖を抽ん出て花を開く。眞の白色にして形鷺の如し、故に名有。〔キ〕【桐の花】 其の葉圓大に

して尖り、長く角有。尖り滑かにして毛有、最も成長し易し。花を先にして葉を後にす。三月花咲く、朝顔の花の如し。白色に少し紅有。

【金柑の花】 其の樹橘に似て高からず、五月白花を開く。【枳穀の花】 木橘の如くにして小さく高さ五七尺、葉橙の如く刺多し。春白花を生ず。【鴨足草】 一名ゆきの下といふ、其の部を見よ。【木芍藥】 牡丹の異名也。【羊蹄花】 葉の長さ尺餘、牛の舌の形に似たり。夏に薹立つ花を開く、而して實を結ぶ。【麒麟草】 高さ尺ばかり莖葉景天草に似て小く、其の葉淺綠にして鋸葉有。莖のはしに花を生ず、花も又景天草に似て黃也。夏より秋に至つて其の花尙ほ有。〔ユ〕【雪見草】 卯の花の異名。【鴨足草】 石がけ、陰濕の地に生ず。高さ五六寸、細き

毛有。一莖一葉、初生の時は虎の耳の形に似たり。夏小花を開く、淡紅色、蝶々の如し。【百合】 其の葉短くして廣く竹の葉に稍似たり。白花四垂のもの、姫百合、鬼百合、袂百合、黑百合、博多百合其他種々有。〔ミ〕【都草】 四月黃花を開く。花の形豌豆の花に似て色よし葉小にして三つに分る、仙臺萩の如くして小也。實は莢にて兩々相對す。【蜜柑の花】 樹の高さ丈餘、其の葉兩頭尖り綠色にて表光る。四月小花咲く、色白くして甚だ薫高し。【水葵】 水鏡とも云ふ。葉は蓴に似て夏黃花を開く。又白花有、水中に生ず。人家近きところに非ず、人見る事稀也。〔シ〕【椶櫚の花】 三月木端莖中に於て敷の黃苞を出す苞中に細子有、列をなす、即ち花を孕める也。狀魚の孕めるに似たり。

是を棕魚亦棕筍といふ。漸く長じ、苞を出す時は花穂を成す。黄白色、實を結び纍々として大さ豆の如し。【芍藥】春芽を出し叢をなす。茎の上に三枝五葉、牡丹に似て狹く長し。一二尺、夏の初め花開く、紅白紫の數種有實を結ぶ。牡丹の實に似て小也。【胡蝶花】四月花開く、狀鳶尾の花に似て小也。灰白色黄の紋有、實を結ばず。【下毛の花】小木也、叢生す。四月花咲く、あつまり開きて盛久し。眞紅あり、淡紅有。葉はすいかけに似たり。〔ヒ〕【姫百合】其の葉長ふして狹く尖り、柳の葉の如し。紅花六瓣四方に垂れざるもの山丹也。四月花咲く、根小にして瓣少なし。【菱の花】一名蔆、其の葉角有。三月蔓を生じ葉水上に浮ぶ、平にして尖り、光鏡の如し。葉の下の茎に股

有、一茎一葉、兩々相ちがひて蝶の翅の如し。五月小さき白花を開く。日背きて晝合し宵炕す。【百日紅】さるすべりとも呼ぶ高さ丈餘、花片皺有、赤き茎葉相對す。四五月始て花咲く、六七月頃迄つゞく。生命長し、故に此の名有。【鼓子花】此花朝顔の花の如し。淡紅色、晝間咲きて夕しぼむ、故に此の名有。蔓草也。【未草】河骨の類也。其の葉蓮の如くにして大也。其の花葉にしきて八重也。夏晝花開く、夕しぼみて水に入り晝又出づ。未の頃より花萎む故に此名有と。【射干】からすあふひの部參照。【瓠花】數種有蔓草也。其の葉冬瓜の葉に似て少し圓く柔毛有、若芽を食す。五六月白花を開く。實を結ぶこと白色、大小長短種々有。〔モ〕【文字摺花】茎の長さ尺に足らず、

葉は百合の如くして狹し。四五月小花開く、紅白色、花連なりて小也一莖に十餘つらなり開く、紫蘇の如し。【藻の花】水草也。葉の長さ二三寸、兩々相對す。葉細かにして絲及び魚の鰓の狀の如し。節々に連り生ず、即水薀なり。俗に鰓草と名づく。〔セ〕【石竹】撫子の部を見よ。【栴檀の花】棟の部を見よ。【石菖】水石の間に生ず。葉に靭有、高さ尺餘、人これを栽培す一年、春に至つて剪り洗ふ。愈々剪れば愈細になる也。高さ四五寸葉蒜の如く根趾の柄の如し。根の二三分葉の長さ寸ばかりこれを錢蒲といふ。〔ス〕【忍冬花】忍冬の部を見よ。【透百合】白黄紅の數種有、上に向ひて開く。花瓣鮮明にして美也。奥州より出づ。

鳥の部

〔ハ〕【方鳥目】鷸。大さ鳩の如し。黑色、短き尾、尖れる嘴、本紅に末黄也。脚長くして正青也、常に田澤に鳴。大鷸は形大きく形色少し異る。【羽拔鳥】【羽拔鴨】諸鳥、五月羽毛脱落あだかも禿頭の如し、これを羽拔鳥と云ふ。〔ニ〕【鴆の浮巢】水に入つて食をとる。鴨に似て小し。巢を葦の間に造る、水の增減によりて浮く。故に斯く云ふ也。〔ホ〕【杜鵑】形は雀鷂に類して色薄黑く腹白し、鷹の斑有。翅も羽も白き斑有。口中赤く、頭に小冠毛有。夏に至つて鳴く。其の聲ほそんかけたかと云ふが如し。初秋鳴き止む、冬は深山に蟄す。〔オ〕

【時の鳥】 杜鵑を云ふ。〔ヲ〕【老鶯】 夏に鳴く鶯なり。〔カ〕【かんこ鳥】 加豆古宇鳥也。形杜鵑及び虫食鳥に似て少し赤味を帶ぶ。腹白くして黑班なきのみ。夏の末鳴く、秋になつて鳴き止む。其の聲大にして圓亮、かつこうと云ふ如し。山林に住みて人里に近づかず。

【翡翠】 大さ燕の如く啄尖りて長し。足紅にして短し、背の色翠色、碧を帶ぶ。翅毛黑色。

【鴨の子】 事鴨、輕鴨、芦鴨此の三つは四五月に至るまでなほ去らず。或は秋去り冬來るも有、或は夏秋去らずして歳をふるも有。共に沼澤にすみ或は孕み或は孕まざる有。凡そ鴨の子初生其毛黄白色、卵を出てよく水上に浮ぶ。〔タ〕【鷹の塒入】四月羽毛をかへんとする時、鳥屋の内に放つ。間もなく脱落して新毛

生じて七月中旬舊の如くなる。【橘鳥】 杜鵑を云ふ。〔ネ〕【練雲雀】 雲雀鷹。凡そ六月毛をかへて舊に改む。俗に呼むで練雲雀と云ふ。毛を替ふる時、其の飛ぶ事速かならず、故に鷹を放てこれを捕ふ。是を雲雀鷹と云ふ。〔ウ〕【童子鳥】 杜鵑の異名、この鳥冬は深山の木の空虚に住み頭の毛皆落て小童の髪の如し。【鵜飼】 【鵜舟】 【鵜縄】 【鵜遣】 【鵜匠】 此の鳥卵を生ず。口に其雛を吐く。岐阜長良の鵜飼六月避暑、納涼の爲に近國より來て見物す。其の時の舟を鵜舟と云ひ鵜を遣ふ人を鵜遣と云ふ。鵜縄長さ一丈二尺、中の首に鈎を入て腹中に入らぬやうにす。鵜飼は凡四五月より八月三十日を限りとす。【鶯の附子】 鶯の子は春巣立て夏飼へば六月の間に毛を替て冬至の頃

鳴習ふ。故に鶯の子に鳴の字を結びて冬季とはなる也。しかれば夏は聞き習にて或は引鳥の親に附、或は笛を以て引音を教ふ。稽古は夏の間なれば附子は夏とす。〔ク〕【沓手鳥】　時鳥の異名也。此の鳥前生に沓を作て賣けり。百舌鳴是を買て價を拂はず故に百舌鳥は此の鳥の來る時はかくれて出でずと古き語に有。【勸農鳥】　杜鵑の一名也。此の鳥農業を勵まさん爲め四五月に來り田をつくらば早くつくれ時過ぐればみのらずと鳴くと云へり。【水鷄】　大さ鳩の如くにして全身蒼黑の斑有、淡黃赤色を帶ぶ。眼の上に白き條有、嘴蒼くして長く、胸の邊白くして黑白の斑有。尾短く脚長く淡黃なり。夜鳴て朝迄なく。戸を叩くが如し。水邊に有、故に水鷄と呼ぶ。夏より鳴いて秋やむ。

【黑鴨】　かるとも云ふ、鴨の類也。全身黑色、頸のうしろに青色有、光有。眼の上に淡き白き條有、嘴黑し。〔キ〕【剖葦鳥】　蘆原雀、葭剖、鶯に似て大さ雀の如し。青色蒼黑し。〔ア〕【青鷺】　鷺に似て小く灰の斑有。長き尾、田澤、芦葦の中にすむ。鳴く聲喧し、故に此の名有。

秋の巻

花の部

〔イ〕【稻の花】　『夕暮はみやまおろしに我家の門田の稻の花の浪よる』

（後久我内大臣）【糸萩】　花紅に盛久し。【色草】　秋の千草を云ふ。【いなて草】　菊の異名也。『長月の九日に咲くいなて草花は八重にて萬代ぞへん』（藻鹽草）【無花果】　其の實柿に似て本細し。一月にして熟す、故に一熟と名づく。其の樹枇杷に似たりと雖も然らず。葉蓖麻に似て小く裏淡し。【櫟】　槲に似て花は栗の如し。實は椎より少しく大也。木硬くして多く船の艫に作る。實によつて秋とす。【色見草】『秋も早時雨るゝ頃の色見草散らまくをしき山風ぞ吹く』〔八〕【萩】　枝葉長く垂れ地を蔽ふ。形櫻に似て一極三葉、棗の葉に似て又南天の若芽にして尖らず軟也。秋小花をつく、淡紫色、白有。【芭蕉】　春若芽を生じ秋に至て止む。冬根莖枯れず、黄花を開く。【葉雞頭】　雁來

紅の部を見よ。【花紫】　春種を下す。長じて苗の高さ一尺、葉は謝落金の葉に類し小也、差直して生ず。三月花を開く、梢の葉の間にあり。色白、又紅及び黄のもの有、下に長き蕚有てこれをうく。實は形圓く尖れり。【濱木綿の花】　萬年青に似たり、俗に濱おもと呼ぶ。海邊に生ず、七八月頃白花を開く。莖高く伸びて梢に數花集りて咲く秋季實を結ぶ。【榛】　樹低く小にして荆の如し、叢生す。冬の末花咲く、櫟の花の如し。枝をなし下に垂る。長さ二三寸、二月葉を生ず。若芽は櫻桃の葉の如し。皺多くありて細き切有て尖る。【柞】　山木也高きもの二三丈、葉は柏に似て秋紅葉、冬落つ。〔ホ〕【鳳仙花】　花に頭、翅、尾足具れり。鳳の形の如し、故に名有。苗の高さ二三尺、莖

に紅白の二色有、大さ指の如し。葉長くして尖る、極の間小花をつく。夏の初より秋の終迄咲く。白、赤有。【鬼灯】五月小さき花咲く。紅白、古根より自ら生ず。實は秋に至りて赤くなる。子供それを弄ぶ。【南瓜】三月種をおろし四月苗を生じ蔓を多く出す。節々に根有地に着く。其の葉の狀蜀葵の如し。八九月黄花を開く、瓜を結ぶ。圓くして大さ水瓜の如し。其の色、緑或は黄、或は紅有。南蠻より來るといふ。【杜鵑草】葉は鷺草に似て短く小也、節多し。花の蕾は筆の如く秋咲く。六出有、中より蘂出て又花の形をなす。蘂毎に小さき紫の點有て杜鵑の羽の形に似たり。莖の高さ一二尺に過ぎず。

〔へ〕【辨慶草】高さ一二尺、之を折れば汁有。葉淡緑にて光澤有、柔

かにして厚く匙の形をなす。夏小さな白花を開き實を結ぶ。連翹の如くにして小さく中に黑子有、粟粒の如し。【布瓜】六七月黄花を開く。五出、胡瓜の花に似たり。〔ト〕【烏頭】其の苗高さ三四尺、莖四角をなす。花紫碧色、穗をなす。其の實細かにして小さし、桑の實の如し。【黄蜀葵】二月種をおろし夏に至りて始めて成長す。六月花開く、大さ椀の如し。とき色、紫心六瓣にして立つ。朝咲き晝に萎む。夕べに落つ。【胡黄連引】千振し苗の高さ五六寸一根に數莖を生ず。其莖細くして淡紫色、七月花を開く。桔梗の花に似て小さく黄也。千振といふは味苦し、秋白花を開き山野に生ず。藥に用ふ。【杼】三四月花を開く黄色也、栗の花に似たり。其の實食用に供す。〔チ〕【千代見

草】【契草】 共に菊の異名也。〔リ〕【龍膽】 其の葉笹に似て厚く九月花を開く、紫色にして上に向く。白色のものあり。又笹龍膽とも名づく。〔ヌ〕【白膠木紅葉】 灌木也、木の形椿の如し。五六月青黄色の穂をなす、一枝に累々たり。七月實を結ぶ。〔ル〕【縷紅】 莖葉共に細く松藻の如し。莖より蔓を出し八月小さき紅花を開く。形丁子に似て長さ六七分、愛すべし。〔ヲ〕【女郎花】【茶花】 女郎花、山野に生ず。七草の一種、花黄にして集り咲く。莖の高さ二三尺、枝は對生、節の間に葉を生ず、細く長し。花の白きものを茶花と呼ぶ。【荻】 山野にも水邊にも生ず。よしの如し。葦などと交り生じ、よく似たり。水草の一種。【翁草】 麥門冬の一種にて葉は大、暮春より夏にかけて

純白也、故に此名有。後漸く青くなる。根に門冬あり、秋紫の花を開く。【弟切草】 六七月黄花開く、單葉也。五瓣にして細き蘂有、莢を結ぶ。三稜有、中に細子有、藥に用ふ。此の名古事に依る。【旋覆花】 二月以後芽を生ず、莖細し。六月花咲く、菊花の如し。深黄色七八月迄咲く、多く水近く生ず。【白粉の花】 春芽を出し、高さ二三尺、叢生す。葉淡青にして柔く、白鷄頭に似たり。花は朝開き晝萎み夕開く。深紅有、白有。五出、單葉也。【車前子】 春苗を生じ葉地にしく、匙の表面の如し。大きなるもの有、長き穂を生ず。鼠の尾の如し。花甚だ細小、青色少し赤き實を結ぶ。【老母草】 三四月一莖を抽んで出て淡黄花を開く、穂の如し。其の莖高からず、實を結ぶ。初め

は青く熟すれば眞紅也、累々として南天の實に似たり。〔ワ〕【吾亦紅】其の花紫にして黒色を帶び豆の如し。野生にして七草の一種、高さ三四尺、葉は細く長く鋸齒をなし青色、七月花咲く。實は桑の實の如し。【雁來紅】 莖葉穗實共に鷄冠の如し。其の葉九月に鮮紅を呈す、花の如し。『鷄頭や雁の來る時猶赤し』(芭蕉)〔カ〕【苅萱】 莖葉節穗皆葦と同じく小也、古根より春芽を生ず。【桂の花】 八九月花咲く、實なし。此れに菌桂、巖桂の二種有。菌桂は葉柿の葉の如くにして尖り狹く光澤有。花は黄、白有。巖桂は其の葉に鋸齒有、枇杷の葉の如し。俗に呼んで木犀とす、香氣高し。【老鴉瓜】 一名土瓜。即其の根土氣をなし實瓜に似る、故に此の名有。熟すれば赤し鳥好んで之を食す。

三月苗を生じ其蔓鬚の多し。其葉圓くして馬の蹄の如し。六七月五瓣の小き黄花を開き簇をなす、實を結ぶ事累々たり。【櫧の實】 三四月白花を開き穗をなす、栗の花の如し。實を結ぶ、大き槲の實の如し。【楓】 紅葉と稱す。〔タ〕【煙草花】 葉菜より大也、紫白の細き花を開く。或は八九月莖の頭に小白花を開く、赤色を帶ぶとも云ふ。紫苑の花に似るとも云ふ。【蓼の花】 二三月頃繁茂し秋に至つて穗をなす。細かき花咲く、紅、白色種々有。〔ソ〕【蕎麥の花】 苗の高さ一二尺、赤莖綠葉、小白花を開く。〔ツ〕【月草】 【露草】 莖は紫色にして葉は小笹の如く碧色の小さき花開き形豆に似たり。可愛らしき花にして草むらに多し。【つるもどき】 【つる梅】 葉は圓くして尖り、野梅の

葉に似て小さく淺き鋸齒有。冬凋み春芽を生じ五月頃小白花を着け南天の花の如し。初めは青色の小粒なるが秋に至りて黄に熟す。葉悉く落ちつくしたる後皮四つにわかれて中より紅の實現はる、頗る美し。

【蔦】【蔦かづら】【蔦紅葉】 木に纏ひ細根を出して樹皮に着す。蔓にして秋に至りて紅葉す。〔ナ〕【梨子】 高さ三四尺、尖りたる葉、尖有、二月白花を開く、雪の如し。【棗】 夏芽を生ず、故になつめと云ふ。實秋に至りて熟す、黄にして少し赤味を帯ぶ。味よし。〔ラ〕【蘭】 長さ二三尺四時常に青し。葉細く狹く長く鋭し。花は黄緑色、紫の斑有。春芳しきものを春蘭と云ひ色濃く、秋芳しきものを秋蘭と云ひ色淡し。〔ム〕【木槿】 此の花朝に開き暮に落つ。其葉尖り極及び齒

なし。其の花小にして艶麗、或は白く、紅有又一重、八重種々有。五月咲く。【木欒子】 樹葉木槿に似る。花は黄にして細かし。實の殼酸漿に似て其の中に實有、熟せる豌豆の如く圓くして黑く固し。五六月頃花咲く。【椋】 枝葉とも椿の如し。其の葉對生す。五六月白花を開き實を結ぶ。大さ彈丸の如し、狀銀杏の如し。〔ウ〕【欝金の花】 二種有。欝金香は花を用ひ、根を用ふるものは其の苗はじかみの如し。其根大小指頭の如し。外黄、内赤く、人以て水に浸し色を染む。少しく香有。花は白く質紅也。實は小豆の如し。【梅もどき】 いるもどき、つる梅の部を見よ。【漆の花】 樹の高さ二三丈餘皮白し。葉椿に似て花は槐に似たり。實は本の心黄也、六七月頃刻みて汁を取る。【茴

香】　高さ三四尺、肥えたる莖、葉絲の如し。五六月花咲く、色黄、實を結ぶ、大きさ麥粒の如し。輕くして細きかど有。〔ノ〕【野菊】　野原に自然と生ずる菊を云ふ。花葉共に菊に似て小さし。淡紫の花多く稀れに黄花ありとぞ。〔ク〕【觀音草】　葉蘭に似て小く狹く短し。石菖に似て鋭からず、六七月莖抽ん出て小花咲く穗生ず。淡紫にして其の蕾の時愛すべし。【常山花】　其の葉甚だ臭し。高さ丈、葉圓く尖り少し皺ありて尖らず、六月細かき花咲く、白紅まじる。【葛】　其の葉楮に似て面青く裏白し。風吹けばよく飜る、恰も掌を返すが如し。故に歌人葛の葉の裏見と稱し人の恨にたとふ。根冬或は春先苗を生ぜざる時掘て用ふ。【虞美人草】　花四瓣色艶罌粟に似て小也。四五月花

咲く。【檻】　木、葉花共に木瓜に類す。木瓜に比すれば實大きく黄色也。花は林檎に似ておそく咲く。實は秋季熟す。【九年母】　木は蜜柑より長じ安く早くみのる。すべて蜜柑に似たり。【草牡丹】　葉は牡丹に似たり。單の花開く。實又牡丹に似たり。【炎花】　軟かなる蔓草也。小さき白花をつく、中少し紅あり。子供其の花をとり唾にてしめし莖につく方を上にして肌につくるに丁度炙の如し、依つて名とす。【山路草】　菊の異名也。〔マ〕【曼珠沙華】　金燈花とも云ふ。冬春葉茂り、夏季花を生じて葉枯る。其の葉石蒜に似て人嫌ふ。【榲桲】　樹林檎の如く花白　綠　色也。風味よく梨より輕ろし。實秋に熟し香高く味よし。【冬青】　其の葉冬も青く光澤有。圓長にして尖らず、軟かなる

鋸齒有。夏小さき白花をつく。秋實を結ぶ、熟すれば紅となる。〔ケ〕【鷄頭花】花の形を以て名とす。春芽を出し夏に入て高きもの五六尺短きは僅に數寸、六七月梢の間に花開く。紅、白、黄の三種有。花久し。〔フ〕【古枝草】萩の異名。【木芙蓉】水に出るものを草芙蓉と云ふ、即ち蓮の花也。陸のものを木芙蓉と云ふ、此の花蓮の花の如く美し。八九月始めて咲く。紅、白、黄、八重なる有。實を結ばず。〔コ〕【金剛草】山野に生ず。高さ三尺、すべて萩に似て小く、七月花を開く、莢をなす。【蒟蒻の花】春芽を出し五月これを移す。長一二尺、花紫也。【犬子草】形丈の子の尾に似たり、故に名有。山野に生ず。葉穂共に粟に似たり。色黄色にして實なし。〔ア〕【牽牛花】朝毎に花

咲く故に名づく。【藍の花】葉蓼に似て七八月淡紅色の花咲く。【蘆の花】花風吹けば雪の如く地に落つれば綿の如し。〔サ〕【三七の花】春芽を出し夏高さ三四尺蔓高さ三四尺、葉菊に似たり。莖に赤き角有夏秋黄花を開く。藥金絲の房の如し。〔キ〕【桔梗】山野に生ず。紫色を正花とし、又白色有、紫白交る有。單重有、八重有。【菊の花】かたみ草、星見草、百夜草、千代見草、齮草、山路草、其の他種々の異名有。【枳殼】橘に似たり。高さ五七尺、橙の如く刺有。春白花を生ず。垣とす。〔ミ〕【茗荷の花】其の子花共に根に生ず。それを茗荷の子と云つて食用とす。【蜜柑】實熟する時は蜜の如し、故に名づく。橘の類也。〔シ〕【紫苑】其の葉二三相連り五六月黄白紫の花咲く。

黑き實を結ぶ。【白菊】 白き菊のこと也。【秋海棠】 葉は葡萄にも似て小さく赤き條有て美し。花は海棠に似て秋の中頃咲く。〔モ〕【木犀】 桂の花の部を見よ。〔ス〕【相撲草】 野原の濕地に有。葉地にしいて叢生す。秋莖たちて頂に穗をなす、青白色也。

鳥の部

〔イ〕【稻雀】 秋の雀の事にして稻につきて群れ遊ぶ故に此の名有。【いろ鳥】 渡り鳥の事にしていろ〳〵の鳥故いろ鳥といふ。【伊須加鳥】 頭背蒼く、又腹胸赤く紫也。嘴青くくひちがひ居る故、物事のくひちがふ事にたとへて云ふ。〔ハ〕【初鳥狩】【初鷹】 とや出の鷹を初め

て使ふを云ふ。【鳩吹】 鳩をとるとて手を合せて鳩の聲の如くして吹きならす也。【白雁】 白き雁をいふ。〔ホ〕【頰赤鳥】 形雀よりも小さく背の色も亦雀の如し。其の腹赤く胸白くして雌鶉の如く文の如し。常は草叢にすむ。【畫眉鳥】 形鶯よりも大きく灰赤色。眉白く畫くが如し。頰又白くして間黑し。背上に黑點有、翅黑く、毛の兩端に白毛有。其の聲圓滑にして多く囀る。〔ワ〕【渡鳥】 諸鳥異國より群飛して山林江湖に來る、之を渡鳥といふ。〔カ〕【片鶉】 夫婦相そはず離れて居るをいふ。【駈鶉】 鷹狩をいふ也。之は馬上にて鷹をすえてかり立て鳥に合すをいふ也。【檀鳥】 好んで檀樹に棲む故此の名有。形鳩より小さし。頭背腹共に灰赤色、眼の邊に白色有。翅黑、其小羽

に青黄の斑あり。啄二寸ばかり、角有て黒色、能く鳴いて諸鳥の聲をなす。〔タ〕【鷹の山別れ】七月廿五日鷹巣を立ち出でゝ父母に別るゝをいふ。〔レ〕【連雀】雀の大さ也。頭背胸赤色、翅黒し。羽尾の端少し赤し尾短く黒し、頭の上に毛冠有。林に群をなす、形美し。人飼ふ、聲よからず。〔ム〕【椋鳥】椋の樹に棲む故此の名有。形小鳩の如く頭白く背灰黒色背の下黒白重りて眉淡黄、顋の下腹迄白し。羽黒白交り觜黄也、其の聲ひよ鳥に似て喧く群をなす。〔ウ〕【鶉】原野に棲む、甲州信州に多し。黄赤に白斑あり、朝、ひる、暮に鳴く。春三月頃始めて鳴き、又六月鳴く、中秋に至つて止む。人是を飼ふ。雌は鳴かず。〔ヤ〕【山雀】狀頬白に似て頭黄白に赤味を帯ぶ。眼顋の

邊に黒き條有、背灰赤色、嘴、胸、尾共に黒く腹薄紅く、性さとく よく囀る。胡桃を好むで食す。〔マ〕【猿子鳥】雀の大さ也。全體灰黒色、胸腹淡赤し。羽灰色にして黒き斑有、尾の下兩端に白きもの二つ其嘴短くして赤黒く脚黒し。頭より胸に至つて淡赤にして白きまる有。〔コ〕【五十雀】四十雀の部を見よ。【小雀】狀山雀に似て小さし故に小雀といふ。山林に棲む。頭黒く頬白くして圓き紋の如し。背腹白く翅尾黒し、其の聲よし。〔ア〕【荒鷹】鷹の雛巣をはなれ自ら餌をあさる時、網を以て捕ふ、是を網かけと云ひ。又あい鷹ともいふ。新たに捕ふ故ならん。【猶子鳥】此の鳥常に山林に棲む、多く群をなす。狀雀に似て大きく嘴太し。頭首灰蒼にして柿色の斑有、顋黄赤に

して嘴白し。背青に赤味を帯ぶ、黒き斑有。此鳥多く天に舞へば見事也とぞ。〔サ〕【烏鳳】 三光鳥也。紺碧色、背の上赤を帯ぶ。腹白く羽黒くして少し赤し。頭に冠有、其の尾長し、其の聲清し、日月星と云ふ如し。〔キ〕【啄木鳥】 一名てらつゝき。此の鳥樹をつゝきて虫を食ふ。小なる雀の如く大なる鶉の如し。面桃花の如く啄足青色爪鋭し。其觜より長く鋭し。【菊戴鳥】 形目白鳥に似て背翅青緑色頭の上に黄毛、花の如きものを頂く、故に名づく。〔メ〕【眼白鳥】 頭背翅尾皆黄青にして鮮明也、即ち淡萠黄色也。眼のふち白し、故に名有。胸は白くして柿色を帯ぶ、腹白し。群をなす。〔シ〕【鷸】 形鶉の如く色青く觜長し。田野の間に棲む、未だ雨降らざる時よく鳴く也。

【四十雀】 五十雀とも云ふ。小雀に似て大なり。頭黑く雨頰白くして胸背灰青、翅灰黑くして灰白の竪條有。腹白色にして胸より尾に至て黑雲の紋有、其の聲よし。〔ヒ〕【鴻】 雁に類して大なり。背頭共に灰色、翅深黑、其尾白と黑、腹白く脚黄也。觜黑くして鼻の邊に黄の條有。【鵯】 尾長く蒼灰色、頭上に毛亂れ立ち眼の邊少し赤し。胸灰青、腹の下灰白く黑き斑有、常に群をなす。【鵲】 雀より小也。全體黄にして青味有、頭背頸翅に黑色を帯ぶ。腹黄白く嘴灰色、脚黑し、其聲よし。〔モ〕【鴟】 又百舌鳥とも云ふ。鳩に似て小さく頭背尾に至つて黄褐色、嘴鋭く末曲る。小鳥をとり食ふ、鷹の如し。其聲高く喧し。〔セ〕【鷄鴿】 稲炎鳥と同じ。

冬の巻

花の部

〔イ〕【石蕗花】 葉莖共に蕗に似て少し硬く光澤有、山に多く石間乾土に堪ふる故に此の名有。根より莖を抽んで出て葉よりも高く伸び上に形野菊に似たる黄色の花群り開く。〔ト〕【冬至梅】 冬咲く梅。八重、花淺紅也。〔チ〕【茶の花】 葉は梔子に似、花は白薔薇に似る。實はしゆろの如し。〔カ〕【寒菊】 冬の菊也。【寒梅】 冬の梅也。〔ヤ〕【八手の花】 葉の形蓖麻の如く又楓の葉の如くして大也。冬凋まず、葉元一

つにして岐多し、七八に分る。白花を開き黑き實を生ず、毒有。〔フ〕【冬牡丹】 八月より葉出で十月より花咲く、又寒牡丹とも云ふ。【冬櫻】小樹也。花葉彼岸櫻に似て垂れず、冬季花咲く。〔ユ〕【虎耳艸】 一名きじん草。花は四月咲く、雪の下と云つて冬季とす。〔ヒ〕【柊の花】五瓣にて白花を開く。【枇杷の花】 夏の枇杷の部を見よ。〔ス〕【水仙花】 八重のものを眞の水仙とす、然れども單重のものにしかず。單重のものを金盞銀臺と名づく。

鳥の部

〔ハ〕【隼】 雌を隼といひ、雄を鶻と云ふ。形鷹に似て蒼黑、胸

腹斑有。毛をかへてより略鷹と同じ。〔チ〕【千鳥】 海水の邊にあつて群をなす故に斯く名づく。鷗に類し、鶺鴒に似て大也。其の頭青黑く頰白く眼の後に黑き條有。背蒼黑く翅黑く腹白し、胸黑く嘴も又青黑し。尾短く脛黃蒼にして細く長し。冬最も多く水上に飛び友を呼ぶ。千鳥の種類多し。〔ヲ〕【鴛鴦】 其の羽毛五彩有、頭に玄纓有、頸に紅糸有、背に小さき羽有、俗に劍羽と云ふ。九、十月多く至る。雌雄仲よきもの也。〔カ〕【鳧】 野鴨を云ふ。此の鳥雁より後に來り春は雁より後に歸る。【寒苦鳥】 形鷄の如くして四足、肉の翅有。夏季毛羽五色其鳴聲鳳凰我にしかずと云ふが如し、冬季毛落つ。寒をしのぐといふところより此の名有。〔タ〕【鷹】 其の頭に毛角有、其の性猛し。

此の鳥に三種有。隼の類、鷹の類、鷲の類。鷹の尾十二枚、長さ五六寸、よく合て末は圓く黑白の重紋有。〔ク〕【角鷹】 鷹の類也。猛し雌雄皆鷹に同じけれどそれより大なる事三倍也、鷲よりは小也。〔ミ〕【水鳥】 浮寢鳥。水鳥は夜鳴く、啄長くして尾短し。【木兎】 全體褐黑色に白斑有、頭目猫の如く眼の外に白きまる有。眼中黃赤にしてよく廻る、鳴聲梟に似る。【鷦鷯】 形鶯に似て小さし灰色にして斑有、觜鋭く錐の如し。冬の朝さく人家の近くに來りて鳴く。〔ヒ〕【鷄】 大さ雀の如く頭黑く白き斑有。顋と頰眞黑也。其の聲清し、多く囀づる。

俳諧歳事記 花と鳥終

大正七年十二月十日印刷
大正七年十二月十五日發行
（俳句作りやう）
定價金四十五錢

著者 永井湘南
東京市神田區裏神保町三番地
發行者 酒井福次
東京市神田區今川小路一ノ四
印刷所 塚田印刷所

不許複製

發行所 東京市神田區裏神保町三番地
芳文堂書店
振替東京五九六五番
電話本局一二〇九番

◀芳文堂新刊書目▶

三橋芝村編書
□書方練習 實用三體書翰文
和装 定價金四拾錢 送料金六錢 美本

三橋芝村編書
□三體女子手習用文
和装 定價金四拾錢 送料金六錢 全一冊

森破凡著
□忍術虎の巻
菊半裁 定價金四拾五錢 送料金四錢 美本

奥村繁次郎著
□おいしく手輕な料理と菓子の拵へ方
洋装 定價金六拾錢 送料金六錢 箱入

五十嵐葉村著
□實用新書翰文
四六版 定價金四拾錢 送料金六錢 並製

英語研究會編
□英語新會話
寸珍版 定價金貳拾錢 送料金貳錢 クロース

和田房子、飯沼しづ子共著
□圖解 裁縫獨まなび
和装 定價金六拾錢 送料金八錢 美本

G1
1,8

終